

コミュニティ拠点としての継続性とオルタナティブ性からみた廃校施設の活用に関する研究

STUDY ON UTILIZATION OF CLOSED SCHOOLS AS COMMUNITY CENTERS BASED ON CONTINUITY AND ALTERNATIVE USE

建築計画分野 M13TD014 窪野琢也

全国的に統廃合が進行する一方で文部科学省の取組みにより廃校活用が促進されている。現在、そうした取組みによって生まれた廃校活用の継続的な運営やコミュニティ拠点を失った地域の衰退が問題となっている。本研究では従前の学校がもっていた役割に対する廃校活用のオルタナティブ性と運営の持続性、地域コミュニティへの影響の評価から今後の廃校活用における課題と可能性を明らかにし、活用手法の新機軸を指定することを目的とする。

Consolidation of school is increasing, on the other hand closed school utilization is promoting by ministry of education, culture, sports, science and technology. Recently, it is a problem that continued management of the closed school utilization and decline of the region who have lost their bases. In this study shows challenges and possibilities from evaluation that alternative of the role that previous school had and sustainability of management, influence on the community. Based on them this study shows new utilization technique of closed school utilization.

1. 研究の背景と目的

少子化、過疎化、施設の老朽化を背景に自治体の財政負担軽減の観点から小学校の適正規模、適正配置を目的とした統廃合が全国的に進行している。平成24年までに建物が現存している廃校は全国で4,222校あり、更に毎年400から500校の小・中学校が廃校となっている¹⁾。増加する廃校に対して文部科学省は平成15年に「廃校リニューアル50選の選定」、平成20年に「財産処分手続きの弾力化・簡素化」、平成22年に「みんなの廃校プロジェクト」を行い廃校の利活用を促進してきた。そうした取組みによって廃校活用が盛んになる一方で、活用したにもかかわらず、再び施設が閉館するなど廃校活用の継続的な運営が問題になっている。従前の学校と全く異なる施設が増加し、コミュニティ拠点を完全に失うことは地域にとって大きな損失であり、ただ廃校を活用するのではなく従前の学校が担っていた役割をどう担っていくか、地域の共有財産としてどう活用していくかという視点がこれまではあまり重要視されてきていない。単なる施設ではなく、元学校として、地域コミュニティとの密接な関係性を考慮した活用が今後求められると考える。

廃校に関する研究は数多くされているが、廃校活用を経時的に捉え、その活動や組織構成の変遷を追い、施設の継続性とオルタナティブ性について論じた研究はまだされていない。

本研究では統廃合によって発生した廃校を活用している事例を対象に運営の持続性、従前の学校行事がもたらしていた効果に対するオルタナティブ性、地域コミュニティへの影響の評価から廃校活用における課題と可能性を明らかにし、今後の運営や活用計画における新機軸の指定を目的とする。

2. 調査概要

地域との関わりをもちながら活用を行っているものを抽出し、主体別に合計10事例の運営者、自治会、利用者にヒアリング調査を行った(表1)。廃校活用で開催されているプログラムに関しては地域への配布資料や年間行事計画を収集し、ヒアリングと合わせて主な内容や利用者などの情報を抽出した。

表1 調査対象一覧

No	施設名	場所	運営主体	継続年数	主な活動
1	Ms	高知県高岡郡津野町貝ノ川床鍋	地域住民	12年目	宿泊施設
2	Si	高知県高岡郡四万十町下津井	地域住民	3年目	宿泊施設/調理場
3	Kk	兵庫県神崎郡市川町上牛尾	地域住民	11年目	貸し教室
4	Kc	兵庫県粟粟市千種町鷹巣	地域住民	4年目	宿泊施設/地域活動
5	Sk	兵庫県芦屋市三条町	地域住民	15年目	貸し教室・グラウンド
6	Ss	京都府船井郡京丹波町質美上野	地域外/住民	3年目	店舗・販売/貸し教室
7	Cm	兵庫県篠山市小田中	民間企業	14年目	子ども向け体験学習施設
8	Sg	高知県四万十市 中半	社団法人	16年目	宿泊施設、自然体験学習施設
9	Ak	京都府綾部市鍛冶屋町茅倉	NPO	15年目	宿泊研修施設/貸し教室/自然体験
10	Mt	高知県長岡郡大豊町川口	移住者	9年目	宿泊施設

3. 活用に至るプロセス

(1) 統廃合実施背景

統廃合の協議は行政からの打診で行われている。住民の多くは学校の存続を望んでいたが保護者意見を尊重し、複式学級や小規模校での存続を提案できずに協議が終わるなど住民全体としては不本意な結果になった

ている場合が多い [1][2]。

② 活用に向けての協議

活用にあたり、住民発起のものは住民有志が統廃合や現存していた校舎の廃墟化を機に検討委員会を立ち上げ、ワークショップを行うなど活用に向けて意見抽出を行っている [3][4][5]。地域外有志の場合はまず行政に掛け合い、ある程度活用の方針が決定した状態で住民に向けて説明会やアンケートが行われている [6]。民間企業の場合はまず行政が活用の方向性を定め、外部有識者を集めて検討を行っている。その後、指定管理の形で民間企業が携わる [7]。

③ 活用に対する要望

ヒアリングやワークショップ、アンケート結果からみられた住民からの要望は、日常的な憩いの場、特産品の販売、教室の貸し出し、宿泊施設、飲食店、葬祭場、歴史資料館、高齢者施設、生涯学習施設などが挙げられる。校舎を開放し公民館的な利用をするものと、全く用途の異なる施設に転用し運営を任せてしまうものと大きく2種類に分かれている [8]。積極的に地域活力を高めていこうとする意識をもつ住民はあまり多くないと言える [9]。

行政は活用において賑わいの再生を考え、農村の交流施設や子ども向け施設の打診が行われている [10][11]。また、移住者が宿泊施設として活用を打診した際は施設へのアプローチの検討や駐車場、浄水設備の取り付けを求めるなど地域外から利用者が訪れることに対して少なからず抵抗感を持っている [12]。

今回の調査では住民がもつ要望において地域外利用者へ施設を開放する意識はみられず、あくまで住民自身が利用することを考えており、行政、地域外有志が考える活用方針との食い違いがみられる。

(4) 用途決定

住民主体のものは教室の開放によって住民自身で使用するスペースをある程度確保した上で宿泊施設や店舗として活用を開始する。地域外有志は住民説明会を経て、ある程度の住民合意を得ることで行政から活用の許可をもらい、当初の活用方針の通り宿泊施設や自然体験施設など地域外利用者を受け入れる施設として活用を始める。行政からの打診で始まったものも同様に交流施設として活用が始まる。

4 廃校活用の経時変化

開催されているプログラムの「対象」「目的」を要素「I, O」「A, B, C, D」に細分化し、掛け合わせから得られたパターンを6つ [a, b, c, d, e, f] に分類した。(表3)

4-1 廃校活用がもたらす影響

廃校活用によって地域内外から人が集まるようになり、交流をするように変化している。廃校によってコミュニティ拠点を失った地区同士が利用することで交

表2 開設に至るまでの実態

PTAの意見を尊重	
[1]	結局、人数が少ない。少人数で学級編成も出来ないんだから、統合して2クラスになるとかっていうことを考えた方が子どもの為にはいいんじゃないかなって言われると、やっぱりそうかなって。(Sk)
[2]	低学年が1人ずつしかいないって言ったでしょ。そっちの方の親はやっぱり、今後0になる状況もあるから、もっと人数の多い学校への統合を希望すると。一人じゃかわいそうって発言があったので、全体としてやむなしという方向に動いた。(Kc)
開設に至るきっかけ	
[3]	閉校が決まる時、6月だけけども、これは大変なことになったと。あと3月まで9ヶ月ほどしかない。私たちは50人くらいで閉校するまでの部会を作った。(Kc)
[4]	やっぱり活性化というか、下津井をなんとかせなかんと思って。(Si)
[5]	始め、ここは廃れてよ、古い校舎をそのまま置いてたやが。ガラスは割られるって感じて。(Ms)
[6]	市役所内にみどり文化のネットワークという仮の名前でこの小学校を活用する事務局ができました。それから8月に事務所をこちらに移転し、8月に地元説明会をもう1度。(Ak)
[7]	地域との関わりはなかったですね。なんか市とかがやってはるけど、地域ってのはあんまり関わり無かったですね。ここの小田中って集落はある程度あったは思うんですけど。ほとんど関心がないという状態やったと思います。(Cm)
活用への要望・意見	
[8]	一番多かったのは、みんなが集まる場所。その次にお店。次が文化施設。次は農業関係の産業センターみたいなもの。(Ss)
[9]	いつまでもつかわからんもん使ってどないするんやと。後の世代に異物を残すな。負担になると。(Kk)
[10]	過疎化の進行から農村の交流施設を打診したというのは聞いています。壊してしまわずに賑わいを残すような施設として活用してほしいという声があったと聞いています。(Ak)
[11]	統廃合で校舎が空いたので、これを何に活用するかという時に市議員さんが、子どもがここから居なくなるってことは地域が廃れるような感じになって元気がなくなるといって、子どもの為の施設にしたいなということ。(Cm)
[12]	勝手に使われるってことに抵抗があるし、知らない人がどんどん来るってことにも抵抗があるし。とにかく不信。ここを使わせてって言っても、なんであんなに勝手に使わせなかんがって言うおばちゃんがいる。(Sg)

表3 開催プログラムの分類

対象	I		O	
	地域住民	地域子ども	外部全般	外部子ども
目的	A	B	C	D
文化の継承	文化の継承	趣味・自己啓発	他者との関わり	利益
パターン	対象×目的	プログラムの特徴		
a	I-A	文化継承／地域内の濃いつながり／伝統的		
b	I0-A	文化継承／伝統の変容／地域外の力を利用した継続		
c	I-B O-B I0-B	個人活動／施設内、内輪で活動収束／内包的		
d	I-C I-B-C	地域内交流／趣味や地域行事を媒介／住民の居場所		
e	O-C O-B-C I0-C I0-B-C	地域外も含めた交流／イベント的		
f	I-D I0-D	利益重視		

表4 廃校活用がもたらした影響

集まる機会、場所ができる	
[13]	隣近所やったら家のことを言うたりするけどもね。離れた西と東の人がここ来たら仲良うなって言えるわね。ここにあって大抵ね、みんなことわかる。ここがNHK。救急車来ててもここに掛かってくるもんね。「誰一？」って。(Ms)
[14]	昔はそれほど他の地区と関わるってことはあまりなかったな。地区毎やったらな。寄り合いが月に1回あってもな、地区毎やったらな。(Kk)
昔なじみに戻る	
[15]	ここで顔合わせすることで都会から戻ってきた人の顔が見れるようになったことやな。就職でここを出て行ってしまふ。で、定年で帰ってくる。ここがことによって3町区の人が集まる機会があるから、お前誰やったらいいなって感じて元の人がなじみになっていく。(Ak)
衰退の中の抛り所	
[16]	家におるよりも出てきてみんなと色んな話して、これは楽しいですね。家においたらほとんど人に会うことないですもん。(Ms)
自主的な活動をはじめるきっかけになる	
[17]	活動をやる前は自発的にやってないね。集まる機会もなかったの。(Si)
[18]	昨日も道刈りやったり、チェーンソーで木を切ってよ。まあね、お互いのことよ。ここができてそういう意識が芽生えた。(Ms)
[19]	10人ぐらいで集まって、セミナーで習った電柵を自主的に維持管理していくような気運が生まれてきているというのは実態としてありますね。(Ak)
[20]	イベントが過去に比べると増えてきているかな。夏祭りをつくったり、紅葉祭りをつくったり。人は少ないながらも。(Ak)
自分もまちがもつ魅力の再確認	
[21]	人口が減る一方で暗かったけど、巣箱ができてからどっきりお客さん来てくれて、賑やかです。自分たちの若い時はね、早く出たいなんて言っただけど、今はようこそ来たねって言います。(Ms)
[22]	ここができて楽しみが増えたね。子どもも来るしね。やっぱりね、子どもの声が聞こえとると嬉しいね。(Sg)
地域目線へと変化する運営主体	
[23]	経営的にダメならダメで、付き合いというかね、地域のお祭り事や草刈りに勤務時間であっても一緒に酒飲んだりとか配りも手伝ったりとか。そういうことを大事にやっていた時期があって。(Sg)
[24]	学校に住むことになって、やっぱり地域のことも中心になっていかなあかんし、その地域だけじゃなくてまちのことも。自分が楽しくこのまちで暮らしていくために町が弱ってたら、あまりよくないと思うから。(Mt)
[25]	地域でここを盛り上げて運営していこうっていう気運まで持って行けなかったのが休館の一番の原因だと思った。やっぱり維持するためには地元の協力をどれだけ得られるか、理解をしてもらえるか。地元の協力を得るためのプログラムが必要になってくる。どうやって地域の理解を得られるかが継続には必要になってくるんじゃないかなと考えています。(Cm)

流が集約され、廃校活用が新たな拠点として位置づけられている [13][14]。それに起因して異世代の同窓生が知り合いになったりUターンしてきた卒業生が元々のつながりを取り戻すことで地域に溶け込み、廃校活用を行う運営者の一人となる効果もみられた [15]。また住民に対して安心感や喜び、さみしさを軽減や自主性などを与えている [16][17][18][19][20]。地域においては地域外からの刺激でまちの賑わいを取り戻し、住民が自分自身のまちの魅力を再確認するなどの影響が確認され [21][22]、運営者自身が地域目線で活用を行うことで住民の協力関係をつくるなど [23][24][25]、住民や地域への影響から「a- 文化継承」「b- 文化継承 / 地域外活力の利用」「d- 地域内交流」「e- 地域外を含めた交流」の主に4つの開催プログラムによって継続的な運営に関して影響を与えていると考えられる (表4)。

4.2 変遷からみた廃校活用のタイプ分類

継続的な運営に向けての要因を明らかにしていくために、各事例の「a」「b」「d」「e」を継続要因プログラムとし、年度毎にその数を算出しグラフを作成する。さらにその変化の様子から「維持型」「成長型」「縮小型」「中断型」「活用初期型」にタイプ分けを行い (図1)、それぞれの事例の活動変遷を示した。(図2)。

【維持型】開設から現在まで安定的に活動を続けてきた型である。

事例Skは住民が運営し、学校存続時から活動を開始している。地域行事の企画運営を恒例としていた為、活動を行うことが慣習として位置づけられ、代表や運営の入れ替わりもスムーズに行われていた。また活用後は隣接中学校との協働することで中学校の行事計画に沿って定期的な活動を展開している。

事例Mtは移住者夫婦が運営している。学校という地域住民との関係性が非常に濃い建築物を扱うことで何度も説明会を開催し、住民との意見交換を経て、一部の住民有志と協働でプログラムを開催している。移住者としての洗礼を受けた運営者がその経験を新規移住者へ伝えるため、地域内外の人間の良好な関係性の保護やまちに賑わいを取り戻す活動をする為にNPOへ加入、さらに現在はNPOの立ち上げも行き、移住者支援の活動を並行させて行っている。

【成長型】開設時に比べ開催プログラムを増加させながら活用を行っている型である。

事例AkはNPOによる運営である。活用方針の策定を住民・行政・外部有識者で行い、里山の整備と農村交流というテーマで一貫した活用を開設時から行っている。住民と行政の活用方針が同じ方向性であり、地域資源の利活用から地域がもつ魅力を発信するなど、住民が共感して活動に協力しやすいテーマであったこ

とが住民有志の活動へ派生し、プログラムの増加へとつながっている。

事例Sgは社団法人による運営である。地域外に向けた宿泊施設を行う一方で草刈りなどの地域行事や秋祭りなどの祭礼へ参加し、住民との関係を深めたことをきっかけに住民向けプログラムを開催しそれが派生して住民との協働プログラムの開催へ連鎖していく。

事例Msは住民有志による運営である。集落に活気を取り戻す思いで宿泊施設や飲食店を地域外利用者に向けて行ってきたが集落の衰退は進行し続け、一方で活用を通して住民の生活環境の向上を開始する。実態調査を行い、緊急時の対応や高齢住民の情報集約から地域福祉を高めることで活動の幅を拡げている。

【縮小型】開設当時に比べ、ある時期を頂点に活動が衰退してきている型である。

事例Kkは兵庫県が行う生涯学習事業への参加者7名の課題研究の1つとして活用が始まる。住民アンケートを行い、要望に沿って活動を展開させていくものの生涯学習事業のカリキュラムが終わると運営は停滞し、肥大化したプログラムを運営する組織力が無くなったことから大幅に活動を縮減する。現在は近隣住民1名を管理者とし、住民サークルへの教室の貸し出しのみを行っている。

【中断型】活用を断念し施設を休館させた型である。

事例Cmは民間企業による運営である。活用方針を有識者のみで協議し、地域外利用者に向けた施設として開館した。行政主導で6年間、その後は2年更新で民間企業の指定管理を公募し、学校に縁もゆかりもない主体で運営を行い、住民意見をほとんど反映させることなく活用を続けていた。その後、契約途中に活用を放棄する民間企業が運営主体となったことで1年間の休館となった。

5. 継続的な活用に向けて

今回の調査で安定した継続的な活用を行うことができているのは「維持型」と「成長型」であり、これらが今後の廃校活用が目指すべきカタチであると言える。そこで全ての事例の活動変遷をまとめ (図3)、内容と主体、利用者の変遷から継続的な活用に向けた要因を分析した。

【成長型 - 連鎖していく活動】組織変遷をみると活用前に統廃合をきっかけに検討委員会や統廃合記念誌をつくる部会を結成し、今後の運営主体となる組織の前身をつくっている。その後、次々と住民有志や外部団体との協力を得ることで運営規模を拡大していくのが特徴である。

ここでプログラムの変遷をみると「成長型」は住民目線、地域外利用者の目線の両方をもって活動を展開させている。活用に先立ちアンケートやワークショップ

プ、説明会など住民に向けた意見抽出の場を設け、その中で地域課題の解決を目的に活用を始めている。この時の地域課題の多くは過疎化を背景としているものが多い。廃校活用を交流拠点として地域外利用者を招くことで活動を始め、賑わいや活気がまちに浸透してくると、住民は少しでも自分たちのまちの魅力を増進させて伝える為、窓口となっている廃校活用と関係をもつようになり自発的な活動をはじめるといえる。

「成長型」における廃校活用の利用者は開設当初は地域外の者がほとんどで住民は警戒心をもっている為施設にはあまり近づかない。数年経って活動が認知されるようになると住民も利用を始めるという変遷をたどっている。

〔維持型 - 運営主体の新陳代謝〕 事例 Mt は途中で「成長型」と同じような変遷をたどるが、運営者が夫婦 2 人であることから無理に活動を増やすような

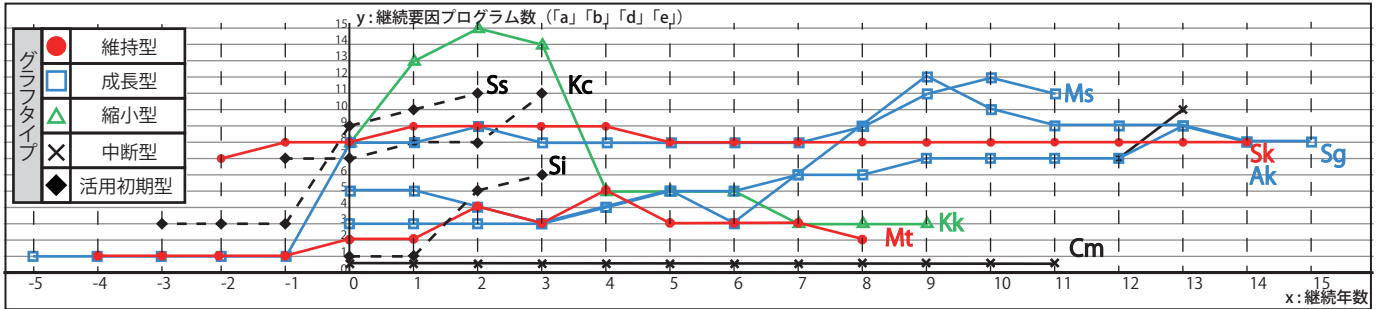


図1 継続要因プログラム数の変遷

事例タイプ	活動フロー	事例タイプ	活動フロー
維持型 Sk	<p>住民によるコミュニティスクール活動</p> <ul style="list-style-type: none"> サークル活動 地域行事の企画運営 <p>・学校存続時から活動を開始</p> <p>組織の新陳代謝</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域行事に住民・子どもが参加 <p>学校との協力関係の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民の生活の一部として位置づけ <p>給食交流会</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化祭観覧 隣接中学校との協働 授業観覧 <p>・神戸 酒鬼番書事件</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校の取組みを地域が見守る意識 <p>中学生と高齢者のふれあいクリスマス会</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校との協働の中で活動を続ける 	維持型 Mt	<p>移住夫婦による活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治会への説明会 住民との協力関係 参加交代道の整備 意見交換の繰り返しの中で構築 宿泊 <p>移住者との協働活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 移住者に向けた活動 移住者ならではの問題の共有 <p>NPOへの加入</p> <ul style="list-style-type: none"> 運営と別にNPOの立ち上げ
成長型 Ak	<p>住民、行政、有識者による活用検討委員会の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 任意団体として活動を開始 活動を軌道に乗せるまで市職員が派遣される <p>NPO化、旅館業許可の取得</p> <ul style="list-style-type: none"> 宿泊 地域外利用者の増加 里山交流大学 学生ボランティアの受け入れ <p>住民有志がグループをつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> 微菜道や里山の整備 同じ活動テーマの団体と協働 	成長型 Sg	<p>地域外有志による組織</p> <ul style="list-style-type: none"> 専務理事が交代し方針を変更 地域行事、祭礼へ参加 住民目線の活用へ 住民説明会 住民の要望を反映 柿の上収穫祭 イベントを通して関係強化 <p>住民による運営サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> 竹林整備 タケノコ祭り 放置竹林対策を開始
成長型 Ms	<p>有志住民による活用計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民による運営 集落生協 居酒屋 地域内外の交流 宿泊施設 <p>集落実態調査</p> <ul style="list-style-type: none"> お守りカードの作成 自主防災訓練の開始 <p>開設10年を機に住民に向けた活動を重視</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部に向けた活動が軌道にのる 	縮小型 Kk	<p>地域外有志による組織</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民アンケート 住民の要望を反映 教室の貸し出し かさがた文化祭 住民向けイベント <p>趣味サークルの独立活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 解散後も趣味サークルによる施設利用 運営組織の解散 近隣住民による管理人の設置 地域外有志によるイベント的活用 後継者の不在
中断型 Cm	<p>外部有識者のみの活用検討委員会を設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域外の子どもの対象とした活動 市営 社団法人 有限会社 体館 1年間 <p>公募での事業者選定</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定管理者の2年更新 頻繁な主体の入れ替わり 契約途中で撤退 	初期型 Kc	<p>住民有志による活用検討委員会の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民アンケート ふるし柿づくり 試験的に地域外との交流を開始 ふれあい食堂 ゲートボール 住民も講師として参加 宿泊 どくだみづくり ブランド米づくり 炭焼きづくり 地域外へ向けた活動を重視
初期型 Si	<p>地域のお母さん方による運営</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政からのもちかけ バイキングの開催 試験的に開催 地域おこし協力隊との協働 大学生の合宿に活用 春期の喫茶店 地域行事への弁当作り 雨の日会 一方で日常的な憩いの場としても活用 	初期型 Mt	<p>住民有志による活用検討委員会の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民アンケート 教室の賃貸 教室の開放 ランチルームの開放 多様な運営者で活用 桜祭り 七夕会 運営者同士の交流 住民向け図書館の開始 地域になかった場所をつくる 子育て世帯も活動始める

図2 活動内容フローチャート

ことは行っていない。あくまで宿泊施設として地域外利用者に向けた活動を中心に行っている。それだけでは「縮小型」がたどったように活動の衰退を引き起こす可能性があるが、組織変遷をみると運営施設とは別にNPOとして活動を行うことで廃校活用と合わせたプログラムを組むなど複層的な運営組織をつくることで安定して活動している。

事例Skの利用者は住民のみで地域外からの利用はほとんど存在しない。活動内容にほとんど変化はなく、住民の趣味サークルへの教室の貸し出しを軸に運動会やラジオ体操などの地域行事を運営している。学校存続時から活動をしていたことで子どもたちにも日常的にその存在が認知され、自然な利用をもたらすことで子どもたちが親世代になった時に今度は企画運営側として携わるような運営組織の新陳代謝が起り安定した活動を行っている。

【行政によるサポート】 こうした活用の裏には行政の存在がどの事例においても確認されている。継続的な地域コミュニティの拠点として活用していくには、前提条件として住民の協力や意見抽出が必要である。そし

て、その上で行政の資金的なサポートがどうしても必要となってくる。NPOや社団法人、民間企業が主体の事例にも同様のことが言えるが、廃校となった学校を運営主体で全ての運営費をやりくりするのは現実的に難しいというのが現状である。全ての事例で廃校活用の前段階で行政を交えた相談、協議が行われている。最初の段階で行政との協力関係を確認し、運営者のみに委ねるような活用にならないような関係性をつくる必要がある。

6 オルタナティブとしての廃校活用

6-1 廃校前後での活動変化

活動の「目的」を7つの要素に細分化し(表5)、従前の学校行事と活用後の活動を「主体」と「場所」で整理した(表6)。

変化の形として、従前の活動をそのまま継続させて行うもの、一度廃れた活動を目的を変容させながらも再興させているもの、新設の活動で従前とのつながりはないが目的の共通性があるもの、消滅してしまったものの4つが確認された。

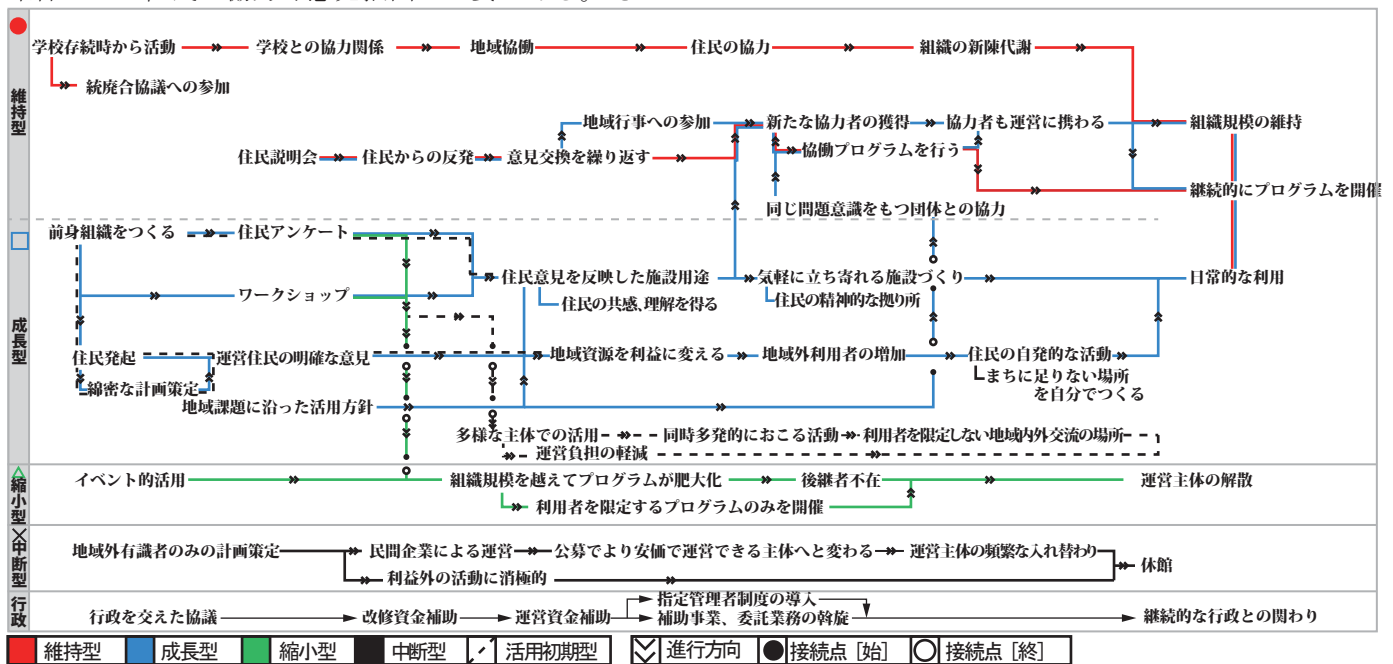


表6 学校存続時と廃校活用時の活動比較

図3 タイプ別活動フロー

場所	学校存続時の活動			
	学校	目的	地域	目的
学校	入学式	5	農業体験	3,4
	運動会	4,5	校外学習	3,4
	文化祭	4,5	老人ホーム訪問	4
	伝統工芸のレクチャー	1	地域行事での活動披露	5
	地域参観	4,5		
	防災訓練	6		
	季節の行事	2,4		
地域	敬老会	4	秋祭り	1
	奉仕活動	6	伝統行事	1
	避難訓練	6	夏祭り	1
	地域運動会	4	子ども相撲	1
	夏祭り	1		

場所	廃校活用施設の活動					
	開催プログラム	対象	目的	開催プログラム	対象	目的
廃校活用	イベント	I,O	2,3,4,5	農業体験教室	O	2,3
	運動会	I	4,5	ボランティア活動	O	6
	文化祭	I	4,5	民泊	O	4
	趣味活動	I	2,3,4	イベント	I,O	2,4
	店舗/販売	I,O	7			
	宿泊	O	4,7			
	食堂の開放	I	4			
	体験教室	I,O	2,3			
	地域行事の再興	I,O	1			
	自主避難訓練	I	6			
地域	夏祭りの再興	I,O	1			
	学習スペース	I	3			
	敬老会	I	4	秋祭り	I	1
	奉仕活動	I	6	伝統行事	I	1
	避難訓練	I	6	夏祭り	I	1

表5 開催プログラム「目的」の細分類

目的	A		B		C		D
	1	2	3	4	5	6	7
文化の継承							
遊び							
学び							
交流							
披露/発信							
地域支援							
利益							

6-2 行事の継続・再興・新設・消滅

〔従前活動の継続〕 学校で行っていた活動の踏襲は秋祭りや夏祭りの祭礼、運動会や文化祭の学校行事にみられ、主に〔維持型〕において確認された。継続開催はまちに賑わいをもたらしている。イベントとは違い、脈々と受け継がれてきた行事を今もなお行うことで住民にまちへの誇りや愛着を育む。自分たちのまちを自分たちで動かしていこうという自発性、自立性をもたせる効果を担っている〔26〕〔27〕〔28〕。

〔休止していた活動の再興〕 活動の再興は夏祭りや子ども相撲といった祭礼にみられ、主に〔成長型〕において確認された。住民だけの力では存続できなくなった祭礼を地域外活力を利用して再興し、まちに賑わいをもたらしている。こうした住民の精神的な充実を従前の学校に変わって廃校活用が担うことで地域のコミュニティ拠点として廃校活用が位置づけられ、住民が自分たちの居場所として訪れるきっかけや子どもの声をまちに取り戻すことで安心感をつくっている〔29〕〔30〕〔31〕〔32〕〔33〕。

〔新しい活動による代替〕 活用前後での大きな変化は地域外利用者が訪れるようになったことである。廃校になったまちは当然ながら子どもが非常に少なくなっている。そうした現状を捉え、住民交流の場を設け、地域外活力を取り込む窓口的な役割を担うことで従前の学校が担っていたまちの中心性〔34〕〔35〕〔36〕〔37〕や活力が生まれる根源としての役割を担っている〔38〕〔39〕。

表7 オルタナティブプログラムが与える影響

行事を終やさない責任感	
[26]	最初の頃から地域で、プログラムから準備体操から司会から全部コミスクの構成団体で。あまり学校にお世話になっているとは。抜きでも運営できます。(Sk)
[27]	運動会にはそれぞれ得意分野にお年寄りが、よっしゃ私の出番や、みたいなのがあるってのが良いとこで、お年寄りも楽しめるかなって。(Mt)
[28]	草が生えてきたら、みんな集まってるしちょっとやろうかっていう風にもなるんですよ。運動会するから草を取りに来てくださって一声かけたら、たくさんの方が来てくれる。自分らの場所やと思ってる。行事にも参加しはる。(Ss)
精神的な活力	
[29]	出来る前はほとんど集落、住民だけのお祭りでしたわ。巣箱出来た後は宿泊客もおおですよ。もういろんな人がここに入ってくるようになったんです。地域の外も中もみんな集まってここの夏祭りはすごい楽しいで。(Ms)
[30]	お祭りはやっぱり楽しみです。人が来てくれることは本当に楽しみです。(Ms)
[31]	うちのお客さんも夏祭りに参加してもらうんですよ。お客さんとやるようになってからは賑やかになって、えいって言ってくれるようになって。(Sg)
[32]	子ども相撲が復活して、伝統を活かせるということは、子どもさんが集まるから、ものすごく楽しみ。(Om)
[33]	やっぱり子ども達とかその保護者なんかはやっぱり喜びました。地域の方もそれを見ながら楽しんでました。(Om)
憩い、喜び、楽しみ	
[34]	ランテールームがあるときもええねん土曜日ね。井戸端会議じゃないですけど雑談をしたり、みんなで楽しんで。憩いの場になるとるわ。(Ss)
[35]	それはそれは離れ難くて最後まで立ち話してるんです。そういうつながりが楽しいですね。若い方からみたら私もあんな老後になりたいわ言うて。(Sk)
[36]	尽きないね。子どものときに出会ってからもう30年ほど経ってるでしょ。サークルでまたあの方と一緒に。一緒に体操できるって喜びがね。いいなあと思って。知らないお顔じゃなくて、お見受けしたことあるなあって思うとね、ずっと入っていきますね。とっても楽しいんです。(Sk)
[37]	もう37年ほどサークル活動をしてるんですけどね。そこへ参加しだすとそこでの活動だけじゃなくて、ラジオ体操とか運動会に参加したり。それからお友達が増えますよね。今まで籠っていた人が。すごい楽しいです。お友達が増えて、おしゃべりすることが楽しくなって、みんな仲いいですね。(Sk)
新しい刺激	
[38]	交流人口の増加は地域にプラスになる。地域が高齢化すると、こじんまり固まろうとするとところへ、若い全く違うエネルギーが入ってくるのがものすごく刺激になる。刺激は必要です。どんどんこれから必要です。問題は今の段階では耳にしたことがないね。これから先は起こってくるかもわからんけども。(Ak)
[39]	狭い範囲での技術力はあるけども外から色々な情報をもった人が来てくれて、話をしてくれるとプラスされて、良い形ができとんやないかなって思う。(Ak)

〔活動の休止〕〔成長型〕は祭礼の再興を行う一方で、運動会は事例 Sg、事例 Ak で共に休止となっている。

6-3 廃校活用タイプとの関連

以上のことを踏まえて各事例をみると、〔維持型〕の事例 Sk が最もオルタナティブ性が高い活用をしていると言える。廃校以降に従前の学校行事が地域に与えていたような影響力のあるプログラムをもつことは難しく、学校が存続している間にある程度の活動を始め学校が行政との関係性を構築しておく必要性と住民への活動の浸透をはかる必要がある。〔成長型〕の事例 Sg が行う夏祭りの再興は行事の継続以上に住民に与える影響は大きいと言え、廃校活用を通して地域外活力を利用した〔成長型〕ならではの効果である。

7. 結論

廃校は継続的な活用を通して衰退したまちを暫定的に再興する力を持っている。しかし、廃校活用は常に衰退と隣り合わせであり、オルタナティブ性のような質的な活動を開催する前にまず継続性を獲得しなければならない。それには3つの条件「住民意見の抽出」「運営組織の新陳代謝」「地域外活力との複合」を満たす必要がある。

活用にあたってまず「住民意見の抽出」を通して住民との関係性を構築し、更に地域資源の活用や過疎化の脱却など、住民が共感できる活動テーマの設定を行う。こうした活動を通して企画運営への協力者を得ることで「運営組織の新陳代謝」をはかり、組織を一枚岩ではなく複層的にしていく必要がある。そしてプログラムは教室の貸し出しや地域行事の開催など住民主体のものを確保した上で、余剰空間を宿泊施設などとする事で「地域外活力との複合」をはかり、地域内外の交流を生み出す。そうして住民への刺激を生み、且つ施設として自立した運営を目指すことが求められる。

廃校後は以上の3つの条件が重要であるが、純粋な質的活用を目指す活用手法の新機軸として今後求められるのは、学校存続時からの計画方針の策定である。廃校は一般的な空き家のような無くなってからの計画策定ではコミュニティ拠点としての意義を十分に満たすことが難しくなる。行政は出生データによる児童数増減の算出から保護者や地域へ統廃合の必要性を訴える動きがある。いつ頃まで学校として存続させることができるのかを早い段階で行政が判断し、地域へ話を持ちかけることは可能であり、それによって廃校までの期間を利用し、学校と地域が協働してつくり出す新しい学校の在り方やオルタナティブ性の高い廃校活用の方針を十分に模索することができる。それは同時にトップダウン的に進む統廃合に対して示唆を与えるものになると考えられる。

参考文献

- 1) 文部科学省「廃校施設等活用状況実態調査」

討議

討議 [内田 敬 教授]

2つあります。まずタイトルに関して、ずっと理解できなかった。私の理解では「廃校施設のオルタナティブ性に着目したコミュニティ拠点としての継続性の条件に関する研究」のようになると思うんですけど、この理解でいいのかということ。「継続性とオルタナティブ性からみた」と並列されているんですけど、その主旨を教えてください。

もう1つは結論のスライド。継続していくためには3つの条件(①住民意見の抽出②運営組織の新陳代謝③質を重視した活動の展開)を段階的に満たしていく必要があるとなっていましたけれども、2番目の新陳代謝、それも必要なんだろうけど1番難しいところでもあるし、という話があって。その3段階が必須となると、かなりしんどい。尚且つ、1、2、3の相互の関係がよくわからなかった。その3つが1、2、3の順番にという意味で段階的ということなのか。それは重要度を言っているのか、時間的な順番でいっているのか。もう少し詳しく教えてください。

回答

1つ目のご質問ですが、まず廃校施設の継続性をみようというのが主旨としてあります。継続性への条件を考えた上でオルタナティブ性を問うていきたいと考えています。つまり、継続性を見て、さらにその中の要素としてオルタナティブ性をみていく。タイトルとしては並列に見えてしまうかもしれませんが、オルタナティブ性だけでなく、あらゆる継続性の要因を探りながらもその中の1つの重要な要素としてオルタナティブ性を捉える意識をもっており、そのようなタイトルになっています。

2つ目のご質問は、まず、1と2の関係性について。組織を同じ代表でやっていくのではなくて、いろんな主体と関わり合いを持ちながら組織を新陳代謝していくために、最初に廃校活用をする上で住民の意見を抽出することで、今後の運営に携わってってもらえるような人材を最初の段階で確保していくのが大切という意味でこの順番になっています。3番目のオルタナティブ性を最初の段階で満たしていくべきということもあると思うんですけど、最初からいきなりオルタナティブな活動をしていくのは難しい部分があって、その前に1、2の条件を踏まえた上でオルタナティブ的な活動、元々の学校が担っていた要素を廃校活用も担えるような検討をしていくのが、段階的にふさわしいのではないかと考えており、時間的な順序として1、2、3の条件を挙げています。

内田教授：話を聞けば分かったような気もします。結論としてはこうなのかもしれないが、もともと違うベクトルの話をやるからにはもう少し整理して頂きたい。

討議 [倉方 俊輔 准教授]

内容は整理されていて面白いなと感じたんですけど、結局プロ

グラムの優劣が継続するかを決めるって視点で全体的に分析をしているとおっしゃってましたが、お金の面というか、補助金がどこから出るのかとか、それが打ち切られたりとかそれが割り増しされたとか、そういうので決まってしまうような感じも思うんですが。そういうのは一切触れられていないきれいな論文だなと思うんです。そのあたりをもう少し説明して頂きたい。入った民間業者が撤退するとか。結局そういう問題じゃないかなと思うんですがそのあたりいかがでしょうか。

回答

自立性というか、どうお金を工面していくかという点を確かに今回は全く触れていないんですが、どの事例も行政の補助が必要で補助を受けた上で活用をしています。でも、それでは廃校活用のふさわしい姿として言えないと思うんです。そういった現状を踏まえた上でどう現実的にこの活用を住民たちがやりながらうまくお金の面も工面してやっていくかという部分として、少しだけ発表でも触れていますが、成長型で見られているような、住民の居場所を確保しながら、余裕のある場所を宿泊施設にしたり、住民がずっと世話するのは難しいのである程度自炊に任せるだとか、住民が校舎全体を使うわけではないので、場所が余ってしまう、そういったことを利用して費用を工面する仕組みが今の所の事例で現実的な部分となっています。

倉方准教授：その時に継続性とオルタナティブ性が並列してるっていうのはやっぱり最後までおかしいと思うんですよね。要するに、継続してるんだったら工場に使っても継続してると言えば継続してるので。つまり、お金の面で自立することを価値とするのか、それともあくまでも質の問題でコミュニティというものを価値にするのかっていうのはやっぱり最後まで決まっていな感じがあって。うまくそれが両立するっていうのは理想論だけでも普通はどっかでせめぎあいになると思うんですよね。その時にある所は自分の価値基準でコミュニティがほしいんだとか、ある所はそういう話が入ってくる。結局どっちを可としているのかということとか曖昧に聞こえる。そう聞こえるところを最終的な論文でなんとかして頂けるといいなと思います。

討議 [吉田 長裕 准教授]

途中、組織の中で地域外の人とどう関わるかという話が出てきたと思うんですけど、このあたりのコメントもいいですか。内部の方が主体的に携わる場合と外部の方がプログラムを立てることに違いがあるという認識をしてるんですけども。

回答

大きな違いとしては内部主体のものは自分たちのまちに必要なものを自分たちは考えて、とても細かい用途を考えています。外部主体のものは地域を俯瞰的にみており、大規模的な、交流をもたらすような違いが見られます。